

もしも猯岳が桃太郎の子孫で真っ直ぐな性格だったら

木入香

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

昔々、ある所に、お爺さんとお婆さんが住んでいました。お爺さんは山へ芝刈りに、お婆さんは川へ洗濯に行きました。ある日、お婆さんが川の側でせっせと洗濯をしていますと、川上から大きな桃が一つ。流れてきました……

それから数百年後。物語は動き出す。

## 目次

もしも獺岳が桃太郎の子孫で真っ直ぐな性格だったら | 1

もしも獺岳が桃太郎の子孫で真つ直ぐな性格だったら

とある日の夜。那田蜘蛛山は戦場と化していた。

鬼。それも十二鬼月と呼ばれる鬼の上位一二人で構成される内の一人が、この山にいるだけならともかく、その鬼を中心とした鬼の集団が闊歩しているともなれば、この惨状も納得出来るものである。

「これは酷いな」

一人の青年が、地面に転がった元は人間であったであろう血肉の塊を見て眉をひそめる。頸回りに勾玉のような装飾が光る青年の格好は、背中に大きく「滅」の字が刻まれた黒の詰め襟に、その上から同じ黒色に所々に灰色の三角模様が入った着物を雑に羽織っているものだ。

しかしここは夜の山の森。街灯などもある訳なく、月明かりが枝葉の隙間から頼りなく地面を照らしている程度の光量の中で、全身黒を基調とした衣装に身を包んでいる青年の格好は、闇に溶けてしまつて分かりづらい。

黒く乱雑に跳ねている短髪のを掻き上げ、元々悪い目付きを更に細めて暗闇の奥を見つめる。

「獺岳さん、これは……」

獺岳と呼ばれたやや細身で長身の青年は、後ろから声を掛けてきた青年へ振り返る。そこには、彼と同じような黒の詰め襟を身にまとつた若い男女数人が立っており、周囲へ警戒というよりは、怯えた表情を浮かべて落ち着きなく視線を動かしていた。

獺岳を含めた彼等は、夜な夜な人を襲い、食らう化け物。鬼を狩る為に組織された集団。鬼殺隊の面々である。

鬼とは元々人間である。遙か一〇〇〇年程も昔に鬼となり、現在に至るまで討伐適わず、その血を分け与えることで鬼へと変貌させる元凶、もしくは始祖の男。その鬼の首魁の頸を跳ねることが、長らく続く、鬼殺隊の信念である。

「俺からあまり離れるなよ？　ここは敵地のど真ん中だ。怖いのは分かるが、必要以上に緊張するな」

「は、はい」

同行している隊員へ注意し、自身も腰から下げた鞘さやから一本の日本刀を抜く。日輪刀にちりんとうと呼ばれる、特殊な金属から生まれる唯一鬼を倒すことが出来る武器である。持ち主の技量と特性によつて色を変えるその刀。彼の手の中にあるそれは、刀身が黄色に輝いていた。

鬼は日差しを浴びると塵と化して死んでしまう。それはどれだけの強さを誇る鬼、十二鬼月であつても例外なくだ。もしくは、鬼にとつて禁忌の名があり、それを口にすればたちまちに血の呪のろいによつて消滅してしまう。しかし、言つてしまえばその二つだけである。それさえ注意すれば、頭はじが弾はじけようが、心臓うがを穿たれようが、全身を細切れにしようが、再生よみがえし蘇よみがえつてしまう。

弱点の少ない鬼を、能動的に倒す為に生み出されたこの武器であるが、どこを斬つても良いという訳ではなく、正確に鬼の頸を斬らなければ意味がないという所で、鬼殺隊の苦勞がよく分かる。

しかし、この男は違う。

「虎狼丸。どうだ？」

「ワウーン……」

獺岳の足下で地面の匂かいを嗅ぐ柴犬のような目鼻立ちがハッキリした中型犬は、主人の問い掛けに自信なく唸うなつた。

「やはり、この山全体を包むこの悪臭では、獺りようけん犬の探知でも厳しいか。津々しんしんはどうだ？」

「キーキー……」

次に話し掛けたのは、自身の右肩に乗っている、体長二〇センチ弱のニホンザルのような猿の子供である。しかしこちらも反応かんば芳しくなく、鬼の行方を追うことは出来ていない。

そこへ、一羽の鳥が月明かりつきみかりを遮かきって影を作る。

「女木めぎか？　どうだそっちは？」

女木と呼ばれた鳥は高度を落とす、獺岳の目の前で地面に降り立った。

「曇天！・曇天！」

「見つからず……か」

言葉を話す鳥。鬼殺隊の隊員一人一人に鬼を探したり、情報のやり取りを行ったりする為に与えられる、かすがいがらす銚すずめ鴉と呼ばれる鴉である。しかし、獺岳の前にいるのはどこからどう見ても、雉である。風の噂。というか手紙で、雀すずめを与えられたと自身の弟子本人から聞いたので、そういうこともあるのだろうと納得する。

犬、猿、雉の三匹の動物を引き連れたこの男、獺岳は、桃太郎ももたろうを先祖に持つ桃太郎の血を引く者なのである。

「とりあえず、闇雲に歩き回るより、頂上を目指そう。これだけ広いのだから、こちらから探しに行くのは得策ではない。他の隊も生き残って、上へ移動していると信じて進むしかない」

「分かりました」

再び歩みを初めてしばらく。他の隊員の死骸しがいは時折見掛けるものの、鬼の姿はなく、また気配も感じない。骸むくろの様子を見るに、新しいものではなく、少し時間が経っているものようだ。

「この場にはもういないのかもしれないな。あるいは、他の隊へ襲撃に行っているのか。女木、援軍要請ようせいがないかの確認も込みで、再び周囲の索敵さくてきを頼む」

「涼風！ 涼風！」

了承の意味である言葉を残し、銚鴉の雉は再び夜の空へと舞い戻っていった。

しかし、相棒の返事を待つことなく事態は急変する。

「あん？ 何だあ？」

彼等の目の前に立つのは、元服げんぷくを迎えたかどうか程度の見た目の白い着物と白い肌をした男の鬼であった。

「女木……怠慢たいまんだぞ」

そう呟つぶやき、日輪刀を構える。とある技の為に、通常の長さよりも少しだけ短くし、重心位置を若干手元に近く中央寄りにさせた刀の切っ先を相手へ向けた。

「あん？ お前、何か嫌な匂いするなあ。お前食っても美味おいしくなさ

「そうだ」

「ああそうだ。俺は食っても美味くない。むしろ、俺の血はお前らにとっては毒だ」

「あつそ、まあだからと言って、殺さない理由にはならないけどね。それに、後ろの奴らは、美味しそうだ！」

「やらせねえよ。テメエ程度、俺一人で十分だ」

「死ねええええ！」

突如鬼の背中から虫の脚のようなものが複数生え、それが伸びて触手のようにうねり、一斉に襲い掛かってきた。

「ふんっ」

—— 雷の呼吸 式ノ型 稲魂

一回の接触で五回斬るという素早い連撃によって、四本の脚を斬り飛ばした。

「まだまだ増やすぞ！ おりやあー！」

本数が倍以上になり、勢いも増して襲い来る。しかしそれも……

—— 雷の呼吸 式ノ型 稲魂 “改・十戒”

五回斬る斬る技を二回連続で繰り出すことで対処する。

それに動揺したのか、鬼が半歩後ろへ下がるも、すぐにその場で留まった。

「本気で行くぞ！ ここでオメエらを殺さなきゃ、俺がアイツに殺される！」

背中から生やした脚の本数は、先程の二回とは比較にならず、目の前一面を覆い尽くすが如く広がっていた。

獺岳の後ろに控える隊員から怯えの息遣いが聞こえるが、先頭に立つ彼は軽く「フンツ」と鼻を鳴らす程度で表情を変えず、再び技を繰り出す姿勢へと移る。

「うおおおおお！」

「うるさいな。全く」

—— 雷の呼吸 式ノ型 稲魂 “改二・十五夜”

—— “改三・二十重”

一五連撃、二〇連撃を素早く繰り出し脚を斬り飛ばすも、まだまだ

数がある。

「面倒だな。だが、これで終わりだ」

—— “改四・五十雀”

一瞬で五回斬る技を、立て続けに一〇回放つことで五〇回斬る。理屈では分かるが、これを息も乱すことなく行う彼の能力は底が知れない。

ただし、これはあくまで邪魔な脚を斬っただけ。本体の頸を斬らなければ意味がない。そこへ素早く懐まで飛び込んだ獺岳は、地面スレスレの所から一気に刀を振り上げた。

—— 雷の呼吸 伍ノ型 熱界雷

本来なら下から上へ斬り上げて斬撃を飛ばす技であるが、彼はそれをあえて直接斬ることにした。だが、元々刀身が平均のより短くしてある為、ギリギリの所で避けられてしまう。とはいえ刀が届かなくとも斬撃は届いた。これにより、無事に右腕を斬り飛ばすことに成功した。

しかし、鬼の脅威はその再生力にある。すぐに斬られた右腕が元に戻ろうと生え始める。

「あつぶねえな！　だが、これで……」

「油断し過ぎだ」

「！」

振り上げた姿勢から、今度は更に踏み込んで一気に振り下ろした。すると再生の始まった右腕を、今度は刀身で捉えることに成功し、不格好な右腕を再び宙へ飛ばしてしまった。

「だから！　何度斬っても無駄だつてんだよ！　この頸を斬らない限りはな！　すぐに再生してテメエの頸、へし折ってやる！」

しかし、鬼の右腕が再生する気配がなく、一瞬の沈黙が辺りを包む。

「お、おい、何だよこれ……何で再生しないんだよ！」

「さつき言っただろ？　二度は言わねえよ」

「っ！　まさか！」

獺岳の血は桃太郎の血。日輪刀がない時代でも鬼を討伐することを可能とした先祖の血。それに触れれば痛みを生じ、長くもしくは大



量に触れば皮膚が焼け爛れる。体内へ取り込めば、量にもよるがたちまちに死へと至る毒薬。

蟲の呼吸の使い手が、藤の毒へと辿り着く遙か昔から使われた手法。鬼の汚れた血を浄化する聖なる血。鬼が嫌がるのも当然だ。彼の中に流れるそれは、鬼にとって天敵であることから来る防衛反応だからである。

そして、その血を刀身へ流し込むことで相手の再生能力を奪い、確実に追い詰める。それを可能とすべく、手数を増やす為に弍ノ型をひたすら鍛錬し、少ない動作で素早く斬れるように刀身も短くした。

才能の差故か壱ノ型のみ使うことは適わなかったが、それでも鬼を倒す武器を手にしたことで自信が付き、より前向きに生きることが出来るようになっていた。

「もう、俺のせいで誰かが代わりに犠牲になる所なんざ、見たかねえんだよ」

「な……ぐっ……」

「終わりだ」

斬り飛ばされた右腕の断面から侵入した少量の獺岳の血液。その量こそほんの僅かでも、十二鬼月の足下にも及ばない程度の鬼の身体は、体内から確実に蝕まれ、身体の自由を奪っていく。が、命を取るまでの量ではなかったようで、このまま放置していたらいずれは復活してしまう。

それを見逃すはずもなく、ゆっくりとした歩みで接近した獺岳は、そのまま素通りするように自然に頸を斬った。

「一応確認するが、怪我人はいるか？」

「い、いえ。大丈夫です」

「分かった。じゃあ、このまま進むぞ。お？。今ので階級が乙になったか。まあどうでも良いか」

倒した鬼のことなど既に頭の中にはなく、手の甲に浮かぶ文字にのみ注視していた。

この時の他の隊員の心は一つになった。何故これだけの強さで甲ではないのだろうか。そして柱ではないのだろうか。と。しかし、そ

んなことに当の本人が気付く様子もなく、周囲の散策を始めた。

その時、彼の耳に微かにだが聞き慣れた音が届いた。

「雷鳴……？　もしかして……いや、そうか、“善逸”、お前もいるのか。泣き虫の癖に頑張っているみたいだな……よし、行き先を変更する」

「はい？」

「他の隊員と合流出来るかもしれん。こつちだ」

「は、はい！」

彼の足取りは、いずれ自身を越え、柱へと至るであろう弟子に会えるだろうということで、若干軽いものとなっていることに獺岳本人は気付かず、その早まったペースに、他の隊士は全力で付いていくのであった。

☆

そして明け方。空の端が薄らと白く輝く頃に、獺岳達は多くの人達が蜘蛛にされた現場へと到達した。

そこでは上下だけでなく顔も目だけを出した黒子のような出で立ちの集団、隠が忙しなく負傷者の治療に当たっていた。鬼と戦う力が足りない、剣の才能がないとされた後処理部隊がこうして大勢動いているということは、状況は解決したと判断して良いだろう。

獺岳の部隊は、散開してそれぞれ隠の手伝いを行っていた。その中で一人、獺岳は一人の弟弟子の姿を探す。

「あれ？　いねえのか？　つかしいーなあ……」

「え、あれ？　獺岳兄さん……？」

「善逸か！」

声に反応して素早く振り返るも、そこには見知った姿はなく、ただ全身が包帯でグルグル巻きにされたミイラが木にもたれ掛かっているだけであった。ミイラと違う点を挙げるなら、治療済と書かれた紙が貼り付けられている所だろうか。

「ミイラ？」

「僕だよ！」

「善逸か！ 何でお前ミイラなんだよ！」

想像していた姿と違ったこと、そしてそのギャップで笑いが込み上げてきた獺岳は、お腹を抱えて痙攣する。

「あ、酷いよ兄さん！」

「はははは、悪い悪い。だけど、その格好は……ぷつくくくくく」

「何しに来たのさ」

「いや、お前の雷の音を聞いてな。援軍に来たつもりだったが、全部終わっていたみたいだな」

「あ……うん」

「守ったんだな」

「守れたのかな……？」

「守れたさ」

「へへ、そうだと良いな」

周囲がバタバタと動き回っている中で、この空間だけポツカリと穴が空いたように静かであった。

「その隊士。手が空いているなら手伝って下さい」

「ん？ 俺か。分かった」

隠の要請を受けて動き出すも、すぐに足を止めて振り返る。

「じゃあまたな。見舞いには行くつもりだ」

「う、うん。頑張って」

「おう」

力強く頷いて、今度こそ獺岳はその足を進める。その時、木々の間から漏れ出た強い日の光をその背に受け、黒い衣装が光を反射して白く見えた。その背を見た善逸は、彼の中に天を見たと思ったと同時に、絶対に追い付いてみせると決意を固めることとなった。

こうして、那田蜘蛛山で起きた悪夢は、日の出と共に終わりを迎えたのであった。